

僕のアルバイト

島津 勝

僕は六年生になった。そして生まれて始めてアルバイトをやることになった。アルバイトと言ってもお店に一人で泊るだけのことだ。しかしちよっぴり不安もあった。僕は前から自分一人の部屋をほしいと思っていたから思い切ってやる事にしたのだった。

両親が道路沿いにある長屋の一角を借りて商売を始めた。田舎の店だから食料品や日用品、お菓子、それに子供相手の当りくじなども売っている。子供達は何でも屋と呼んでいが、大人達はよろず屋と呼んでいた。なんでもよろず屋と呼ぶのかと父さんに聞いたら

「何でも売っているからそういうんだ」と言った。まさかと思ひ僕は辞書を引いてみた。

辞書には（万屋^{まなや}）と書いてあり、いろいろのものを売る店）と確かに書いてあった。

大きな古い家を六等分にしただけのそまつな六軒長屋で、その一角だからせまくて休む場所は二帖くらいのスペースしかなかった。これでは泊まるも出来ない、しかし誰か留守番を置かなければ物騒^{ぶつそう}だ。家族は両親と僕と妹の四人、父さんは困っているようだったが、ぼくの方をさっきから見ている。



「どうだ、将太、今夜から店に泊まってくれないか、別に寝るだけだからいいだろう。」
「えっ、僕が、一人で・・・」

「怖いことはないだろう」父さんはなかなか返事をしない僕にいらだっている。しかし僕はいやではないが今作戦を考えていたのだ。自分ひとりの部屋がほしい、妹と同じ部屋ではないが一応独立した部屋だ。どうしようか、お菓子もあるし、いいチャンスかもしれないと思っていたのだ。「何でも好きなものを食べてもいいぞ、それに泊まり賃として、一ヶ月百円やろう、」
父さんは僕の腹の内を読んだように笑って言った。僕の腹が決まった。

「よし、泊まる、うそじゃないね、百円、絶対だよ」作戦はまんまと成功したのだ。

寂しいことはない。六軒長屋だからベニヤ一枚の向こうには人が住んでいるのだ。それにとりには、電気屋に勤めているお兄さんがいて、テレビの修理屋さんだ。前に一度見せてもらったことがある。僕の好きな野球だった。あの感動は忘れられない。そのことを友達に話したらみんなうらやましがっていた。

僕はつい得意になって、

「今度見せてもらう時はみんな呼んでやる」

と約束をしてしまったのだ。そしてぼくのアルバイトは始まった。

となりとはベニヤ一枚で仕切られているだけだから当然のように話し声が聞こえてくる。僕は早くとなりの電気屋さんのお兄さんと親しくなりたかった。お兄さんは昼間電気屋に勤め、夜になるとテレビの修理屋さんとなる。そしてお兄さんのひとり言が聞こえてくる。

そのうちテレビの雑音が聞こえてくる。

僕は早くテレビを見たくて眠れなかった。

数日たって僕は大変な事を知った。それはテレビどころではない、それよりも刺激しげきてきだった。この長屋の天井は何の仕切りも無い、だから広い運動場みたいなものだ。夜中になるとネズミが暴れ出す。ベニヤ一枚の天

井だからその動きが手に取るようにわかるのだ。

ネズミは僕が電気を消すと動き出す。

(ガサガサガサ・ダッダッダッ・ゴトゴトゴト・ザッザッザッ) それはまるで運動会でもやっているような騒がしい音だった。

僕は怖くなった。ネズミが暴れ出すたびに天井がゆれ動く。もし天井が落ちてきたらどうしよう、冗談じゃない気持ちが悪い。

僕はたまらず起き上がって電気をつけ柱に掛かっているほうきを手にして身構えた。

ネズミの音のほうをほうきで突付いてやろうと思ったのだ。しかしネズミは僕の行動を見透かしているように静かになってしまった。

僕はしばらくじっと身構えていたがネズミの動きは無かった。僕は待ちきれず電気を消した。ネズミはそれを守っていたかのようにまた暴れ出した。だんだん動きが早くなる。

(ガサガサガサ・ダッダッダッ)

ものすごい音だ。ぼくは音のする方にほうきで力いっぱい突付いた。

(ドンドンドン・ドンドンドン)

するとネズミは雲の子を散らすように、ガサガサガサガサと四方八方に逃げていくのが手にとるようになった。そして電気をつけた。天井のほこりが電気の明かりでキラキラと光って舞っていた。

その音に驚き心配をしてとなりのお兄さんがかけつけてきた。

「どうしたんだ、何かあったのか」

お兄さんはほうきを片手にぼうぜんとしているぼくをみて笑い出した。

「すみません、ネズミの音が凄（すご）いもんだから眠れなくて、」僕はお兄さんに謝（わやま）った。

「あっ、ねずみか・すごいよな、俺も気になっていたけどテレビの修理をやっているからその音で気にならな



いんだ。今まで人が住んでいないところに君が住むようになったからネズミが歓迎しているんじゃないか、「もう直ぐテレビの修理が終わるから見せてやるぞ」お兄さんは笑いながら帰った。

「やった！」僕は思わず叫んだ。これで皆との約束を果たせる。そう思うとねずみのことなど忘れていた。ネズミは大人しくなった。ほうきでつついた天井に少しすき間が出来ている。多分そこから部屋の明かりが入るのだろう。きつとそれを警戒しているのに違いはない。

それ以来ネズミ騒動は鳴りをひそめたが、敵もさるもの、今度は台所に来て悪戯をするようになった。共同台所は何処からでもネズミが入れるようなすき間だらけだ。流し台に置いた野菜などはいつもかじられている。風呂場の石鹸までどこかへ運んでしまうほどだ。みんなでネズミ捕りをあちこちにかけてみたが、たまに引かかる程度でネズミはそんな馬鹿ではなかった。そこで流し場へは食物を絶対置かないようにみんなで気をつけるようにした。たまに掴まえたネズミを見るとまだ子ネズミで、僕の本来の敵は親ネズミなのだ。その親ネズミといえば、こんな畏には絶対引っかからない、時々見るがまるで連結したような大きなネズミだ。そして人間を馬鹿にしたように僕の前を堂々と歩いていく。

ところが大変なことに近頃は店の中に入れてくることがあった。それもそのはず店の敷居には穴があり充分ネズミが入りできることの出来る隙間があった。それに店の流しの排水溝は共同の台所までつながりまるでネズミの通る地下道のようなものだ。だからもうかなり前から店の中にも進入してきているのかもしれない、しかし店で被害を受けた形跡はなかった。ところが、ある日お菓子を買った子供が袋を持ってきた。

「これ袋に穴が開いていた」僕はどきりとした。もしか、と違って棚に並べてあるお菓子を一つ一つ調べてみた。

「やられた！チクショウ・ネズミの奴」僕は思わず叫んだ。これは完全なる仕返しに違いない。しかしこのことを父さんには言わないわけにはいかなかった。父さんは心配してどうしようかと迷っている。

「大丈夫だよ、お菓子を箱の中にしませばいいよ、僕がしまうから・・・」僕はアルバイトがなくなるのを恐れ

てネズミ対策を提案した「でもなあ、保険所にでも訴えられたら大変だぞ・もうすこし様子を見ようか、そのかわりしっかりしまってくださいよ」父さんは笑いながら言った。完全に僕の心は父さんに読まれている。

こうなったらネズミとの戦いだ。そっちがそうくるなら徹底的に退治してやる。僕は覚悟を決めた。そしてその晩から出ているお菓子は面倒くさいがみんなで箱の中にしまおうようにした。勿論父さんも手伝ってくれた。

「これなら大丈夫だろう、将太、もう怖くなって泊まるのが嫌になったんじゃないのか」父さんは笑っている。「とんでもない、こんないいアルバイトを止めるもんか、続けるさ日当を忘れるなよ、」それから当分の間ネズミは出てこなかったが出てきても食べ物が無いのであきらめたのだろう。そして一週間がたった。すっかりネズミのことを忘れて安心してしまっていた。

この前の事件以来隣の電気屋さんのお兄さんとは仲良しになり、今直しているテレビの修理が終わったら一週間だけ店においてやるという約束もしたのだ。これでみんなとの約束が果たせる、僕はその日が早く来ることを願った。そして兄さんの独り言を心地よく聞きながらいつの間にか眠ってしまった。

それからどのくらいたったか覚えていない。突然足のつま先に痛みを感じて飛び起きた。そのとき僕は確かにネズミが部屋のすき間から逃げていくのをこの眼ではっきり見た。

足を出して寝ていたからネズミに噛まれたのだ。僕は痛みのある足の親指をさすって見たが傷はなかった。しかし確かにネズミだ、何も食べるものがないから間違って僕の足をかじったのに違いない、それともお菓子を隠してしまった腹いせなのか、そのことをお兄さんに話したが、まさかと言うような顔をして信じてくれなかった。だから両親にも話さなかった。なぜって、(ネズミにかじられてペストにでもなったら大変だ。)と言って今度こそ僕のアルバイトが中止になりかねないからだ。そんなことであるバイトを止めるわけにはいかない。僕はネズミに襲われない防御策を考えた。その晩から絶対にネズミが入れないように穴と言う穴は全て塞いで、そしてネズミが通りそうなところにピットコンという奴を買ってきて置いた。これは昔蠅を捕るのに使った覚えがある。この上を通ればネズミは忽ち張り付いて動けなくなる。そしてもし噛まれてもいいように靴下を履



いて寝ることにした。細工は流々僕は朝が楽しみだったんだか興奮して寝付かれなかった。静かにして隣のお兄さんの独り言を聞きながら目を閉じた。それから何時眠ったのかも覚えてはいない、突然、バーン、バーン・と言う音で飛び起きた。まるで拳銃の音だ。直ぐちかくに違いない、と思った瞬間、僕はネズミのわなに手をつけてしまったのだ。しかしそれどころではない、僕は素早く電気をつけた。すると店のおもちゃが置いてあるほうに白い煙が少し上がっている、そして火薬のような匂いがあるのだ。僕は慌てた、何事だ、恐る恐る近づいてみた。なんとそこには口から血を流してもがいているネズミがいる、良く見ると口がかなり裂けてもう虫の息だった。

音にびっくりして隣のお兄さんがきた。

「何だ、今の音は、何だか硫黄いおうの臭いがあるけど」彼は僕の指差す方を見て驚いている。口が裂け血を流してピクピクしている大きなネズミが横たわっていたのだ。

「すごいでしょう、ネズミがかんしゃく玉を食べたんですよ・・・どうこれ見て、」

おもちゃの台の上にかんしゃく球が置いてあった。そのかんしゃく球、小さなビニール袋に五個入って十円というやつだ。食べるものがないネズミが間違えてかんしゃく玉の袋をかじったのだ。そして口の中で破裂した。続けてもう一発が連鎖的に破裂した。

「火事にならなくて良かったね、」そう言いながらお兄さんは笑い出した。

「何だ、その手は、ネズミのわなに掛かっちゃったのか、あははは・・・」お兄さんは腹を抱えて笑っている。そして笑いながら僕の手からピットタンコをはがしてくれた。

それにしても火事にならなくて良かった。

夏なので色々の火花が置いてある。その横には当たりくじとか、色紙や紙類が置いてあった。もしこれに火が付けば今頃は火事になっていたかもしれない。そう思うとぼくは寒気がしてきた。今夜の事件は父さんに話さないわけにはいかなかった。

それから何の対策もしないまま数日たったある日のこと、近所のおばさんが猫を持ってやってきた。ダンボールの中をのぞくとまだ小さな子猫が僕の顔を親しげに見ている。

「ねえ、あなたの家猫いらない、今もらってきたんだね、二匹も押し付けられちゃってさ、おたくはネズミがいないかね、」

「ほんと調度いいよ、うちでもネズミがいて困っているんだよ、ねえ、将太どうする」母さんは僕に相談した。勿論僕は大賛成だ、こんな可愛い猫が側にいてくれたらうれしい。一匹は三毛猫でもう一匹は真っ黒いカラス猫だ。僕は三毛の方が良いと思っていた。

しかしおばさんはダンボールから黒い方を出した。「私ら三毛の方がいいからこの黒い方を貰ってくれるかね」僕はがっかりした。

「調度いい、店屋だから黒字になるように黒がいいよ」母親はそう言って喜んでる。

そうか店屋だから黒字になるように黒猫がいいのか、ぼくはなるほどと思った。そして黒猫をもらう事に賛成した。これからは猫と留守番が出来る。それにネズミには猫が一番だとみんなは言っていた。

そんな分けて飼うことになった。まだ生まれて半年もたっていない可愛い子猫だった。僕はなんだか嬉しくなった。たとえ猫でも一人の留守番よりは何となく心強い感じがした。そして真っ黒いからブラックをもじって(ブラ)という名前を僕が付けた。その晩から僕の枕元にはまるで恋人のようにブラがゴロゴロと喉を鳴らして横たわっていた。

ブラは猫のくせに塩せんべいが好きで僕の側に来ては泣いてほしがる。ブラをもらった日に僕が食べていた塩せんべいを上げたのがよほど美味かったのだろう、それ以来僕が塩せんべいのふたを開けるとその音を聞きつけて跳んでくるようになった。

やはりネズミには猫が一番だ。それを証明するようにブラの鳴き声のお陰でネズミがまったくいなくなった。というより影をひそめてしまったのだ。しかしあれだけいたネズミが一度にいなくなるわけがない、今は警戒



しているのだけできっと出てくる。いやもう他の方法で密かに進入しているのかもしれないとぼくは思った。ついにやった。ある日ブラが自分と同じくらいもある大きなネズミを引きずってきた。何も教えたわけではないのにどうやってネズミをとることを覚えたのだらう、偉いもんだ。ブラはネズミを捕って見てくれと言わなければ座敷にくわえてきた。猫がネズミを捕ったら、「よく捕った、よく捕った」と言って猫をほめてやらなければ駄目だ、と母親に言われている。ほめてもらいたいからわざわざ部屋まで持ってくるのだらうか、僕は仕方がないから「ブラ、よく捕った、良く捕った、よく捕った、良く捕った」とほめまくった。ブラほめられて気を良くしたのか盛んにネズミをもてあそんでいる、始めて見る猫とネズミの戦いだ。戦いといってもネズミはもう猫の捕虜だからあわれなものだ。それでもすきがあれば逃げようと思っている。ブラがネズミを放し様子を伺っている。ネズミは今がチャンスとばかりに逃げようとする。それはブラの作戦で逃げ出せるわけがない、ブラは押さえつけ急所を噛む、そんなことを繰り返しているうちにネズミはだんだん弱ってきて動かなくなる。ブラはもうじゃれなくなった。さてどうするのだらう、ブラはゴリゴリとそのネズミを美味そうに食べ始めたのだ。ぼくはもう気持ちが悪くて見ていられなくなって外に逃げ出した。

しばらくしてブラが舌で口をペロペロなめながら満足そうな顔をして来た。ネズミを捕って僕にほめられ、そしてじゃれて遊んで、最後は生きのいい奴を食べられたのだから満足したのだらう。

「どうだ、ブラ美味かったか、」そんな独り言をブラに言いながら座敷に行ってみた。

「何だ、これは、」僕はがく然とした。そこにはネズミの頭と内臓だけが残されていた。ぼくは驚くやらあきれやら、しかしその後始末を僕がしなければならぬ、「いやだなあ、これで百円か、」と僕は嘆いた。

それからブラはネズミを面白いように捕ってきた。でもおかしい、いったい何処で捕ってくるのだらう、もう家にはネズミはいないはずだ、ブラのお陰で近頃ではネズミの姿を見たことはない。僕はこっそりブラの行く先を注意してみた。するとブラは店の流し場から共同流し場までつながっている下水の店の入口の前にじっと座っているのだ。

ここで出てくるのを待っているのだろうか、僕はしばらく様子を見ていた。時々排水溝の入口に鼻をすりつけてはにおいをかいでいる、きつとネズミがいるのだろうか。十分、二十分、三十分たってもブラはそこから動こうとしなかった。僕はしびれを切らして遊びに行ってしまった。外から帰ってみるとブラはすでにネズミを捕まえて例によって座敷の上でもあそんでいた。まさにブラはネズミ捕りの名人だ。その根気のよさと執念に家族のみんなが感心した。だから僕の家では、ブラさま様でみんなから特別可愛がられていた。ネズミを捕ると必ずほうびに塩せんべいが与えられた。それはブラが好物の塩せんべいの入った箱の前に座って「ニャー」と鳴いて塩せんべいをほしがるからだった。

ブラは僕と寝るので僕には特別なついでに猫のくせに僕の散歩にもついてきた。

そして僕が「ブラ！」と呼ぶと素早く反応し跳んできて僕の肩の上にピョンと飛び乗るのが得意だった。

それから三年がたった。長屋の住人がいなくなったのを機会に父親は長屋を買い取り、そこに店舗つき住宅を新しく建て直した。

だから僕のアルバイトも必要なくなり、またブラの仕事も完全になくなってしまった。

活動的なブラは毎日暇を持て余しているようだった。ブラはペットとして可愛がられるよりも外で自由に跳び回る方がいいようだ。そのうちネズミの代わり小鳥を捕ってくることもしばしばあった。ブラは猟犬の生まれ変わりなのかも、ということとは猫だから猟猫なのだ。そんな自慢を僕はみんなにした。

そんなブラの活躍は近所でも評判だった。ある日向えのおばさんがきた。

「あんたの家の猫はネズミを捕る名人だってねえ、一日貸してもらえないかね、家にネズミがいてしょうがないんだよ」

「ああ名人だよ、狙った獲物は絶対逃がさないからね、家にあれほどいたネズミがまったくいなくなっちゃったんだからね」僕は得意になってブラをほめた。そして貸してやることにした。ブラは最初嫌がったがぼくが



行くと付いてきた。その家は古い農家で新築する前の長屋に似ていたから、ブラはすっかり気に入ったのか動こうとしなかった。ということは早くもネズミのおいを嗅ぎつけたのだ。

「この猫はいい艶をしているね、賢そうだし あんたの家は新築してもうネズミはいないでしょうから、この猫をくれないかね」おばさんはブラをすっかり気に入ったようだ。

「だめ駄目！この猫は僕になついているから他所へいってもすぐ家に帰ってきちゃうよ」僕はそう言って断った。ブラは僕の大事な宝物みたいなものだから絶対他人にやるわけがない、またブラだって行かないだろう。高校生になって僕とブラはまるで兄弟のような仲だ。

この車の激しい通りでは他所の犬や猫はみんな車に轢かれて死んでいる。ブラをくれたおばさんの家の猫は、もうとっくに車に轢かれて死んじゃったよと言っていた。

ブラは他所の犬や猫と違って道路を渡るときは人間のように左右を確認する。そして途中で車が来れば立ち止まったり、引き返したりするのだからまるで人間のようにだ。

それからブラは毎日のように向への家のネズミを捕ってきた。しかし他所の家で捕ったネズミをわざわざ家に持ってくるのだから困った。ブラはきっと僕に「よく捕った、良く捕った」といってほめてもらいたいのだろう。

ブラの活躍は近所でも益々評判になった。おしゃべりのおばさんが、ブラのお陰でネズミがいなくなったことをみんなにしゃべったのに違いなかった。でもそれだけ僕の自慢のブラが有名になったのだから悪い気はしなかった。そしてその後もあちこちで活躍した。ある日ブラの動きがどうも鈍いからと思いついて調べた。すると腹が腫れ上がりよくみると乳が大きく硬く腫れ上がっていたのだ。ぼくは急いで動物病院へと連れて行った。

「うーんこれはひどい、間違いなく乳癌ですよ、でも手後れだね、」と獣医はあっさり言った。ぼくは一瞬頭が真っ白になった。

「乳癌って猫にもあるのですか、何とか手術は出来ませんかね・」ぼくは必死で頼んだ。

「うーん出来ないことはないが・・しかし長くは生きませんよ、もう体中に転移していますから・・」

「それでもいいから何とかして下さい」と僕は必死で頼んだ。いっしょに付いて来た母さんも僕の様子を見て何とか手術をしてほしいと頼んでくれた。そして入院した。

ブラをこのまま死なせたのではあまりにもかわいそうだ。もっと早く気がつけばよかった。きっとネズミの食べ過ぎに違いない。

僕は悲しくなった。たった五年間なのに、ブラとの思い出はつきないほどある。

一番の思いでは父さんの車に乗って仕入れに付いて行った時のことだ。途中まで走るとどこかでニャーニャー鳴くブラの叫び声、車を停めてみると車のホロに落ちまいとへばりついているブラがいた。いつの間にか僕の後を追って車の屋根に乗ってしまったのだ。

それ以来僕はますますブラを可愛がった。またブラも命を助けられたと言う思いからかますます僕になついていた。

ブラは手術をしたが医者言うように思わしくなく寝てばかりいて何も口にしなくなってしまった。そしてある日突然いなくなった。

「利口な猫は自分の死を人間には見せないと言うからどこかへ行って死んでいるんじゃないの」と母さんが言った。

「ブラ！ブラ！・・」僕は手当たりしだい呼び叫んだ。しかしブラの返事は無かった。

僕はそれでもと思い、ダンボールに座布団を敷いて、その中にブラの好物の塩せんべいと煮干と水を入れ、ブラのいつもいる場所においてやった。

翌朝、僕は何だかブラが帰っているのではないかという予感がして目を覚ました。

「あっ、ブラがいる。ブラが戻っているぞ」



ぼくは駆けつけブラを抱き抱えようとしたが、ブラの体はすでに冷たく何の反応も無かった。ブラは最後の力を振り絞って僕の作ってやった寝床に入って息を引き取ったのだ。その痩せ細った体はすでに堅くなっていた。

それから当分の間家族は悲しみにくれた。

時代も変わり今ではネズミもいなくなった。何処の家でも今では猫もペットとして飼われている。時には猫を飼いたいと思うが、あまりにも利口なブラの事を思うとなかなか飼う気にはなれない。ブラに申し訳ないよ
うな気がするのだ。